

生活

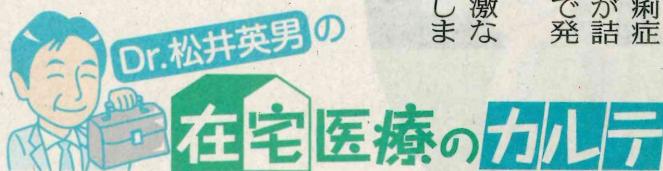
© 東京新聞

●進行大腸がん

進行大腸がんは、便秘や下痢症状が続いているうちに急に腸が詰まってしまう、腸閉塞の状態で発症することがあります。

三十代女性のYさんは、急激な腹痛と嘔吐を訴え、緊急入院しま

旬のさかな 穴子

くらしのこよみ
うつくしいくらしかた研究所

病診連携で在宅療養も

母親の力添えもあって、小さな子どもたちの面倒をみながら、在宅緩和ケアを始めました。

在宅では、痛みの抑制ができ、

食事もできる状況になつたのです

が、再び腸閉塞を起こし、薬剤の持続注射の治療を受けました。それでも症状が改善しないため、次

次第に腫瘍が大きくなり、これ以上治療を断念したのです。

Yさんは、「自分らしく生きたい」という願望がありました。

した。診断は、大腸がんに伴う腸閉塞。翌日、腫瘍の摘出手術が行われました。術後の経過は良好ですが、血液検査で再発が疑われ、抗がん剤治療を受けました。

いつたんは治療の効果があつたものの、骨盤の中にがんが転移し、痛みも伴うように。痛みの緩和と放射線治療が続けられましたが、Yさんは、「自分らしく生きたい」という願望がありました。



には、外科の先生と相談して人工肛門を作る手術となりました。

その後も、腫瘍からの出血に対し、入院しての輸血など、さまざまな対応が必要になりました。Yさんも頑張ってできるだけ在宅で療養し、自分で食事をする努力を続けました。この間には、臨床心理士の先生も交え、患者本人と家族の心のケアが行われました。小さな子どもも、母親の置かれてる状況を漠然と理解し、母親の手伝いをするようになりました。

最期に、Yさんは、皆に囲まれながら、自宅で息を引き取りました。消化器がんの在宅での緩和ケアは、家族の理解と、病院・診療所の連携があつて、はじめて可能になると思います。

(川崎高津診療所院長)

|| 次回は十八日掲載